

中国見聞記

—高岡市第9回青年の翼に同行して—
(1985年)

富山県農村医学研究会 豊田文一

はじめに

私は、国際青年年記念第9回高岡市青年の翼に同行し、8月7日大阪空港を飛び立ち、中国の瀋陽、錦州、北京を訪ね8月13日帰着した。これは青年の国際的交流や感覚、経験の涵養を目的としたものであるが、それと同時に高岡市と錦州市との友好都市締結の調印も重要な使命で、堀市長を名誉団長とし、市議会議長、議員数名も行を伴にした。私は中国の地に足を踏み入れたのは1937年で2年半軍務につき駐留し、その後1972年9月、丁度毛沢東主席葬儀の前日、南廻りのパリ行の便で、北京空港へ給油のため立ちよった以来である。

ただ出発前、軍人として中国に入った経験は絶体に口にしてはならないと諭され、これを厳重に守りつづけてきた。ただ戦争体験はあっても軍医は国際法上非戦闘員であり、戦闘には直接関与しない。戦傷者に対する処置と部隊（山砲連隊）の兵員の健康管理がその任務である。激しい戦闘に参加していたが、巷間に伝えられる惨虐行為は、私どもの部隊に関する限り行ったこともなく聞いたこともない。私は山西省北部忻県附近の村落に駐留すること2年、軍務の余暇は村の診療所の役割もし附近村民の診療も行っていった。村民から豊田大人（ファンテンタイジン）といわれ、お互に戦闘を交えている国という感情もなくここで過した。病気がよくなれば、お礼に鶏の蒸焼の首に赤いリボンをつけてもってくる

やら、果物なども贈られた。

しかしタブーである以上滞在中は一言もこれには触れなかった。以下書き綴る事柄のなかに私の過去の経験も交えざるをえない。

ちなみに堀市長も主計将校として、中国の中部・南部に駐留された由で、挨拶のなかで公式に中国を訪問したのは2回と述べられていた。なお一行には2人を除いて中国での戦争経験はないようである。

空路北京へ

大阪空港より約2時間、かすかに陸地が浮かぶ。眼を下に転ずると海面が広い範囲に黄濁している。楊子江河口間近である。上海の密集したビル上空を通過し、南京附近より北上する。黄河、有史以来、流れにまかせて河南、江蘇、山東の平野に沃土をもたらし、肥沃な農業を育くみつつも、時に北に、時に南に流れを変え、幾条もの流れが黄色を照りかえし、眼下にうつる。機首を下げかかると北京に近い。水田の緑が果てしなくひろがる。しかも日本のような1反畑でなく、区画は恐らく数ヘクタールもあろう。中国の農業近代化の一つのあらわれでなかろうかと思える。

河北省上空で40数年前のことを想起する。天津から約400キロ、その平原で戦闘を交えながら西南方の任県附近に達し、太行山脈を突破し山西への進入の準備をすすめた。その間この平原はくる日もくる日も綿畑、太陽は綿畑から昇り綿畑に没す。2週間山かけは全く見えず、山への郷愁、これが孤独感につな

がる。私ども日本人には特有のものであろう。

さて、中国への道は韓国上空を通り渤海から北京に達すれば2時間余と思われるが、上海上空経由では約3時間半、往路はJAL、復路は中国航空、航路はともに韓国あるいは北朝鮮の領界に入ることはできない。国交をもたない国際情勢のきびしさを一入感ずる。

北京空港、1976年9月、この空港でトランジットパセンジャーとして約3時間給油などで待機した。当時は狭い待合室で十数人の客、しかもここは開放性で外部との出入は自由、仕事を終えた労働者が続々入りこむ。眺めているとサイダーをのみにくる。土産店をのぞいてみると並らべてあるものは硯、筆、墨のたぐいのみ。日本の地方空港にも及ばない。待合室の正面に毛沢東の3mもの塑像が弔意を表してかざられてあったのが今でも印象に残っている。文革当時、鄧小平が「天安門広場や空港へ行かないとサイダーものめない。これで文化国家といえるか」と論評して追放された。この記憶が今でも蘇る。

瀋陽素描

中国の搭乗機の遅延は茶飯事のこらしい。北京発瀋陽行は1時間半も遅れた。そのため瀋陽には午後9時過ぎ、滞在1日半位のうち省政府への表敬訪問などもあり、十分な視察ができなかった。それで短時日にみた瀋陽の感想を書き留める。

早朝ホテル前の表通りに立った。広い通りで車道だけで30m位あるだろう。その道幅一ばいに自転車の行列、工場などへ急ぐのであろう。自動車はトロリーバスを除いて極めて稀である。バスは何れも溢れんばかりの乗客である。北京で聞いた話だが、北京の人口1千万、自転車は750万、ここも同様だろう。たまに走る乗用車はほとんど日本製である。5月韓国へ行ったとき日本製の車はほとんど見なかった。外国製の車は関税150%、しかも公務員は外車使用禁止されていると聞く。

ここではアメリカのフォード、GMなどのブランドが進出し、その現地生産のものを使用している。

ホテル前に立って走る自転車をみながら、乗っている人々を見る。よく気をつけてみるとメガネをかけているものはほとんどいない。世にも不思議でその数をかぞえてみた。10分間に500人は通った。メガネ使用者17人、0.034%である。(サングラスを除く)それで帰ってから高岡市の末広町の街角に立って、試みに車の運転車のメガネ使用者を数えてみたが、200人中68人(サングラスを除く)34%、きである。もちろんこの他にコンタクトレンズのものもあるかも知れないからもっと高率になろう。

帰ってから資料をみると日本人では、小学生10%、中学生20%、高校生30%、さらに大学生は40~50%が近視であると報告されている。高学歴化の進んだ現代の生活では、幼児期より遠方を見ることよりも、眼前20cm~200cmのものを長時間みる習慣をもっている。細字の書物、ことに近距離でテレビにかじりついている。また労働に従事しても近代工業は精密を要するものが多く近視の増加の重要な要因になっているのではなからうか。とにかくこれが瀋陽での第1印象である。

次にホテルの前を通過して仕事に向う労働者を呼びとめた。それは自転車にのせてあるアルミの弁当箱をみたかったからである。快く応じてもらい、言葉が判らないので手真似でそれを開けてもらった。白米がぎっしりつめてある。副食は何かと尋ねてみると昼はこれに汁をかけて食べる。日本では学校給食、勤労者は外食と相場はきまっている。あとでこの地の人に聞いてみると、これが労働者の昼食の通例らしい。何分にも労働者の平均賃金月平均60元(約5,000円)では食の切りつめもうべなるかなである。

Keep Clean!! 道路は全く清潔でごみもみない。くわえ煙草もみないし、抜け捨てられ

たすいからもない。所々で落葉を掃いている人もいる。ボランティア活動かも知れない。昔は路上に痰や唾をはく人もいたが、今はない。勿論自動販売機もない。そのためわが国のような空缶公害もみられない。外国ではフランスに自動販売機はない。渴をいやすためにはカフェーへ入らねばならない。これはフランスの失業率は8.0%（1983年、日本：2.4%）で自動販売機をおくとカフェーや食堂の従業員が失業し、そのため失業率の増加を防ぐ理由と聞かされた。ただし西ドイツに入ると自動販売機がある。ここの公園や歩道の片隅に約1.5m位の高さの獅子の置物があり、大きな口をあけている。それには衛生箱と書いてある。これはゴミ箱で弁当の空からや煙草のすいがら、アイスクャンデーやアイスクリーム（第1区）の容器をほおりこむ。日本のゴミ箱とちがって美的感覚を呼び起す。



第1図 衛生箱（ゴミ入れ）

吸いがらの投げ捨てについて一言触れてみたい。私のみた所では日本では虎の門の交叉点が一番甚だしい。交通信号の長いせいもあるだろうが、霞ヶ関の官庁街へ出勤する人が大部分と思われ、良識ある公務員として実になげ

かわしい。私はヘビー・スモーカーの部類に入るが、くわえ煙草は絶体にしない。その動機は10数年前シンガポールのホテルのロビーからくわえ煙草で街へ出ようとした。そのときホテルのマネージャーからくわえ煙草で吸いがらを捨てたり、たんをはいたりすると罰金5万円とられると注意されてからである。



第2図 御旅屋禁煙通り（この掲示の下にタバコのすいがらあり）

それからもう一つ。高岡市御旅屋通りに“禁煙通り”という看板がはられている。私はかつてその近くに住んでおり、ある会合で商店街の人々に御旅屋通りの清潔感のためにもと考えこの提案をした。幸にそれがいれられ、関係の人々が、わが国で最初に実行した仙台市東三番丁へ視察に行かれ、それから実現にうつされた。5年前である。しかし時々ここを歩き、投げ捨てられたすいがらを数えるといつも10数個みつかると苦々しい限りである。また富山市の総曲輪の商店街にいる私の友人にもこのことを提案したが、それではお客の数が減るといって未だ実現していない。（第2区）

もう一つ付け加えると、これは錦州市の石油工場で見つかったKeep cleanの標語、すなわわ

ち右のように書かれています。

これを具体的に日本的に解釈すれば、所かまわず痰をはいてはいけな。汚い物を捨ててはいけな。所か

| | | |
|----|----|----|
| 不准 | 随地 | 吐痰 |
| 不准 | 乱扔 | 脏物 |
| 不准 | 随地 | 便溺 |
| 不准 | 乱泼 | 脏水 |

| | |
|-----|-------|
| 准—準 | 許可しない |
| 脏—髒 | 汚い |
| 泼—澆 | まく |

まわず大小便をしてはいけな。みだりに汚い水をまいてはいけな。この標語は、この工場だけでなく全国的に流布されているようである。

さて同行の人からホテルの近くで朝市が開かれていると聞いた。早朝約 500m 隔だたった大通りの歩道に何百とも思われる露天の朝市で、品物は畑で取れたばかりの野菜が主で、恐らく市の周辺で作られた新鮮なものばかり、その側にロバやラバにひかせた車がおいてある。1坪位のところに陣どって客を呼んでいる。私は好奇心にかられて一つ一つ見て廻った。買物袋をさげた客が値切りながら買い求めている。珍しいことに計量はすべて分銅づきの棒秤で、日本のような自動計量器は一つもなく、全くの時代ものである。歩いているうち妙な風景に出会った。一人の中年の女性と公安官との口論である。何をいっているか判らないが、道路脇に花卉の鉢が並べてある。公安官が鉢の一つをもち、双方でわめいている。私の推測だが、ここの露店は鑑札があるのでなかろうか。露店税とでもいおうか。この中年の女性は鑑札を持たずに商売し摘発されたに違いなからう。その女性は花卉の鉢を持ちながら公安官に連行されて行った。

瀋陽の夏は暑く滞在していた頃は33~34度であった。出発前ホテルは扇風機だから蚊がくるかも知れん。蚊取線香を持って行くように注意された。しかし私は同行の人を当にして持って行かなかった。話とちがい部屋は何処でも冷房がきき快適である。部屋にテレビ

があり、国営の放送であるが幾度もコマーシャルを流す。それは主に扇風機の広告である。日本では冷房のない家庭はない現在、このコマーシャルを見て日中両国の生活環境の隔差の著しいことが、扇風機の売り込みに必死となっていることでも判るような気がする。

工場見学として、刺繍工場を訪ねた。中国は絹の生産と刺繍は世界的に名高い。しかし旅行中桑の木は見当らない。ここで刺繍を行っている絹は華南の江蘇、浙江、広東などから送られてきたものであろう。しかも絹の歴史を辿ると中国では蚕繭の利用は新石器時代といわれ、殷代の卜辞に糸、帛(はく)、巾(きん)、桑の字が見え、蚕と解される虫形の字もあり、また先秦の古典は黄河沿岸地方で桑蚕絹織が行われたことが記載してある。絹織物の最大の特性は優美典雅な光沢と独特な肌合感触をもつことである。この4000年の伝統をもつ中国の絹は、シルク・ロードの主な商品として東西文化交流のさきがけといっても過言ではない。この伝統をもつ刺繍工場に私どもは案内された。



第3図 瀋陽刺繍工場(手縫い)

工場の工具は 500名、ほとんど女性である。ミシン刺繍と手縫い刺繍があり、繊細な指先で書き出される模様は実に精巧で、中国特有の図柄は人々の心をひきつける。ここで聞いた話では、夏季33度以上になると臨時休業、冷房の設備がないためであろう。ただし冬季は-30度以下の寒冷地であるが、ここでは暖房が完備しているせいだろう。いくら寒くと

も操業は休止しない。この工場に売店があり、市価より3～4割安いというので、同行の多くの人々が財布のひもをゆるめ、買物バックをふくらましていた。(第3図)(第4図)



第4図 瀋陽刺繍工場（ミシン刺繍）

私どもは日程もつまり、観光の余裕も少く、数多いもののうち僅かに故宮を訪ねたに止まった。ここは清の初代の皇帝ヌルハチとその子太宗の皇居の跡であり、1636年完成したといわれ、北京への遷都後は漢族王朝の支配者の墓参のときの宿舎にあてられていた。皇帝が執務したという八角形二重ひさしの大政殿を中心に、左右に数々の政庁機関があり、その壮麗華美の建物は数百年の栄華を物語っている。



第5図 遼寧賓館（旧大和ホテル）

錦州に向うためホテルより瀋陽駅に向う途中、かつて日本の要人の宿舎に当てられたという大和ホテル、満州医科大学（現遼寧大学医学部）の建物を眺め、ことに満州医大出身は富山県にも数名いたし、金沢大学医学部で研究を共にした先輩後輩もいた。これらの人

々は母校は大陸の彼方にあり、その胸に去来する追憶は如何であろうか察するにあまりある。(第5図)(第6図)



第6図 遼寧大学医学部（旧満州医科大学）

なお、瀋陽から錦州に向う列車とすれちがう貨車をみるとどれもこれも石炭を満載して北方へ走る。瀋陽の東方に近接して露天掘で有名な撫順がある筈であり、南へ石炭を送るなら話がわかる。撫順炭坑は史実によれば2000年前から石炭を採掘していたという。この開発の本格化されたのは満鉄の手によるもので、1907年日清間に採掘権の協定からで、東北地区最大の炭鉱として開発されてきた。第2次大戦後中国の国営となり、その埋蔵量5億8千万トンと推定されている。1952年年産1,500万トンと称せられた。しかし北方への貨車に積まれた石炭に大きな疑問をいだき、錦州である要人に問い質したところ、撫順炭坑は採炭量が減少し、東北地区の需要がまかない切れないので、大同炭坑の石炭を送っているという。しかも露天掘の廃坑には、水を入れて鯉の養殖をする、石炭変じて鯉となるでは“おとしばなし”にもならない。

実は出発前、ある知人から折角瀋陽へ行くのなら是非撫順炭坑をみてこいと示唆を受けていたので、行きそびれた撫順に触れてみた。

瀋陽—錦州、約3時間半の火車の旅、車内は広く清潔で、服務員のサービスもよい。広軌で新幹線並み、私どもの乗ったのは一等に当る軟座車で片側通路のコンパート、これが

寝台車にもなり、上下2段の4人席となっている。傍のテーブルにはお茶も用意してあるし、また配り、たえず清掃し、ちり一つないのに床をみがく、停車する前には乗降口の手すりを手がよごれないように雑巾でふきとる。それに運行時間は正確である。ソ連始めヨーロッパの列車の遅延に日程をくるわされた経験を思うと雲泥の差である。ただし、航空機は別として。

錦州市というところ

錦州市は遼寧省西南部に位し、遼西の鉄路、自動車などの枢軸をなす内外交通の要衝である。その面積は17,828平方キロ、富山県の4,250平方キロの約4倍で、錦州市の管轄するところ、5市内区と7県である。日本のように県を中心とする市町村を思うと奇異の感がある。なお、行政機構は、錦州市人民政府、中共錦州市委員会、錦州市人民代表大会常務委員会があり、人民政府は市役所、中共委員会は中央直結の監査機関、代表大会常務委員会は議会の機能をもっているような気がする。もちろん遼寧省内にあり、省政府は市の上級機構である。日本の如く地方自治という考え方がないように思われる。私はかつてシベリヤのイルクーツク大学と金沢大学との姉妹校の締結の予備交渉に訪ソしたが、学長の弁は中央政府に上申し許可をえてからにするよう答がかえった。しかし10年余の今日でも何の返答もない。わが国では大学の意志によって姉妹校が成立している。このようなことを想起し、共産主義の諸国での政治機構はソ連に相通ずる気がしてならない。しかし、錦州市との友好は市はもちろん民間の人々の努力が実って締結されたもので、中国の対日感情の暖かさがうかがえる。

人口 454万、そのうち市内人口は73万、全域に漢、満、蒙古、回、韓、朝鮮等10余の民族がいる。錦州の歴史は古く、原始社会の新石器時代、すでに人類が居住し、3000年の歴

史をもっている。

錦州地区は資源豊かで、金属・非金属が20余種類埋蔵されている。石油、化学工業、機械、紡績は非常に発達し、農業は高粱、とうもろこし、大豆等が多く、また落花生は良質美味で最も名高い。海産に富み、車海老や赤貝などを国外に輸出している。海港として錦西市に胡盧島（ころとう）があり、半島を形作り、その形がひょうたんに似ているので胡盧と名付けられたという。夏季は南風が弱め、冬季は北風を防ぐ美しい自然の地形と3mに満たない干満の差や、とくに工業地帯である錦西地区を控える不凍港であるため清朝末期以来海港として注目されたが、幾度かその工事が中断されていた。しかし満州国時代、日本の手により1934年完成された。今は船舶が岸壁に接岸し、輸出入の門戸として期待が大きい。

また、その南の海浜に大筆架山の景勝地があり、私どもの訪れたとき盛夏の日曜日、数千の自転車やバスを連れ、海岸は人の波、しかも水泳を楽しむものは少数で、多くの人々は海浜に腰をおろして風光を楽しんでいる。ことに水着姿の女性は寥々たるもので、人前に肌をさらさざる儒教的中国国民性の現われかも知れない。また彼等は海への憧憬も秘め、数十キロの行程を自転車をつらね年1回の行楽、涯しない海洋の彼方に眼をみはっているように思えて仕方がなかった。^(第7図)



第7図 錦西大筆架山附近の海浜

錦州市との友好都市締結

8月9日瀋陽における1日半の日程を終え、特快列車にて約3時間余で錦州に着いた。プラットフォームに降り立つと胡占山市長始め要人の出迎え、またかかげられた横断幕“熱烈歓迎日本国高岡市貴賓来我市訪問”がひととき目立つ。駅前広場に出れば、小・中学校あるいは青年団と思われるいくつものブラスバンドは一せいに音楽を奏し、その背後にある群衆から拍手と歓迎のどよめきが起る。ふと駅前の路面をみると水溜りが所々にみられる。今日は晴天、雨が降った筈がない。ホテルに到着するまでの道路も同様、これは到着直前に撒水車でわざわざ埃の立たないように撒水を行ったとのことである。通過道路に人影はない。しかし両側の歩道では多数の市民が手を振ってむかえてくれる。人影はないのは、私どもの車の列が過ぎるまで交通遮断で、交叉点や道路には警察官が直立し私どもの通過を見守ってくれる。まさに貴賓待遇で、恐らく同行の人々にとっても、私にとっても空前絶後の経験であろう。

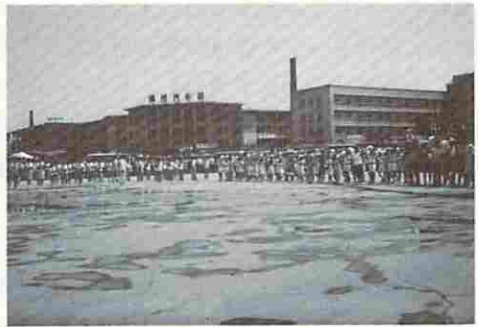
8月10日午前10時より調印式。市政府大会議室には錦州市諸官衙の要人、市民代表100名余、私どもは全員出席、壇上には日中両国旗がかざられ、堀市長と胡占山市長とが厳粛な雰囲気の中に調印が行われ、高岡市と錦州市との間に「日中友好萬古長青」の絆が結(第8図)(第9図)(第10図)ばれた。

その協定書は次の通りである。

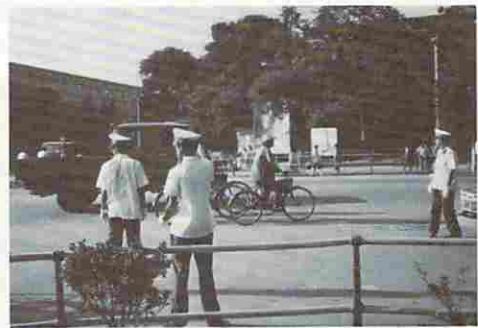
友好都市締結協定書

日本国高岡市と中華人民共和国錦州市は、日中共同声明と日中平和友好条約の原則に基づき、両市間の相互理解と友誼を増進し、繁栄と発展を促進するため、協議の結果、友好都市の締結を決定した。

双方は、経済、科学技術、医療衛生、文化、教育、都市建設など各分野の広範な交流を通



第8図 錦州駅前のブラス・バンドと路面の撒水



第9図 通過の警察官の交通整理



第10図 錦州市役所玄関での出迎え歓迎

じて、絶えず両市間の友好協力関係を強めることを取り決めた。

双方は、これらの交流活動を通じて、日中両国民の子子孫孫にわたる友好と平和に貢献することを誓うものである。

この協定書は、双方の市長が署名した日から効力を生ずる。日本文と中国文は、共に同等の効力を有する。

1985年8月10日

日本国高岡市 中華人民共和国錦州市
市長 堀 健治 市長 胡 占 山



第11図 調印式
左・堀健治市長、右・胡占山市長



第12図 調印終って堀健治市長と胡占山市長の交歓

ちなみに高岡市は、昭和49年ブラジル、サンパウロ州ミランドポリス市と昭和52政アメリカ合衆国インディアナ州フォートウエン市と姉妹都市の盟約を結び、以来経済文化などについて緊密な交流を続けていることは周知の事実であり、第3の友好都市成立は、高岡市として永久に記念すべきことで、相互理解を深め、将来の発展を祈念するものである。

私自身、金沢大学に在任中、アメリカ合衆国バッファロー大学、フランスのナンシー大学と姉妹校の調印を行ったし、ペンシルバニア大学とは以前より姉妹校、また私の時代に西ドイツ・レーゲンスブルグ大学と緊密な友好をかためるため訪問した。この4大学とは、教官、研究生、学生の相互交流が行われ、とくに外国語の教官はこれらの大学から派遣してもらっている。

今回の中国訪問の最も重要なことは、友好都市提携であり、一時期紛争があったものの、永久に続く長い歴史のうちの一齣であり、この度の相互理解は日中両国のあらゆる面で寄与することが大きいと思われる。またレセプションの席上、要人と胸襟を開いて談笑し、和気藹々のうちに終始したことは、今なお記憶に新らしい。

農村をみる

私は中国渡航に際し、人民公社を是非視察したいと念願していた。幸に日程のうちに農村視察が組みこまれており、短時間であったが垣間見ることができた。



第13図 車窓よりみるトモロコシ畑

1937年、瀋陽（奉天）より天津まで軍用列車でこの附近を通過した。記憶に残る印象は広漠たる葦や茅の原野が果しなく続いていた。今は鉄路の両側は3列位に防風林が並列し緑が映える。そこにひろがるものは区画整理された水田、トモロコシ、高粱、大豆などの耕作地が地平線上に果しなく続いている。夕

やみせまれば赤い太陽が輝やくかもしれない
幻想がわく。あの葦や茅の原野の変貌、恐らく
満蒙開拓団の苦労があったのではなからうか
かと思いをはせる。^(第13回)

たまたま北京までのJALのなかで高齢の
人々約30人ばかりと席を同じくした。恐らく
かつて軍務についた人々だろうと心安く話を
しかけてみた。しかしかつての満蒙開拓団の
人々で、僻遠の東部ソ満国境の虎林附近で、
極寒の原野に斧や鋤をふるったことを話し困
苦欠乏に耐え、いわゆる楽土建設に挺身した
当時を話してくれた。富山県人も3名同行し
ていて、とくに懐かしさを覚えた。この鉄路
にひろがる肥沃な耕作地を眺めたとき、機内
で話し合った人々のように、流れうつる風景
も日本人の苦労を思い出す人もあったのでな
からうか。

さて、人民公社は1958年、当時5億余とい
われた人口をもつ中国農村で画期的な意義を
もつ社会改革が行われ、高級農業合作社（協
同組合）の基礎の上にさらに集団化の進んだ
社会形態が生れた。これが人民公社である。
毛沢東の理念“マルクス・レーニン主義と中
国革命の普遍的真理、さらに中国革命の具体
的実践の結合”とした中国における新しい創
造である。言い換えればブルジョアと小ブル
ジョアの残渣を政治、思想の面で排除し、右
翼的な保守思想をたたき出し、生産関係にお
ける人と人との関係における社会主義の同志
的協力関係にまで高めるためである。中国の
農村の都市に比べ遅れている生産を向上する
役目である。つまり従来の合作社（協同組合）
での農業生産をより一層の発展のための水利、
灌漑に巨大な投資を必要としたが、個々の合
作社の資金では到底不可能で、ことに機械の
進歩していない中国農村では土地改良、水利、
灌漑など大規模な建設には多数の労働力の動
員が必要である。農村における新しい社会形
態をうちたてる思想でもある。

かつて“農は大寨に学べ”、このキャッチフ

レーズは当時の農業に対する代表的理念であ
り、わが国でも写真やテレビで放映され、猫
額の土地の開拓の様相が記憶に残り、幾十万
の人員が動員されていた。私は1937年、山砲
兵連隊附軍医として万里の長城を九龍関で突
破し、岩肌をむきだした岷々たる山系の間を
縫って山西省太原南方に進出するとき、昔陽
附近で大寨を通過したので、このキャッチフ
レーズは特に頭にこびりついていた。ここは
石家荘—娘子関—太原への鉄路の南方数十キ
ロの交通路であるものの河床を道路とし、軽
車輛、人馬のみの通過を許す程度のものであ
る。私はあの映像をみて、幾十万の動員で果
して経済的価値があるだろうかと疑の眼をみ
はった。この山間僻地、閉ざされた社会で、
革命後は全く共産思想に洗脳され、中央政府
の上意下達に盲信的な人民大衆でなければ到
底不能であったろう。中華人民共和国国家統
計局編「偉大的10年」によれば1959年人民公
社数24,000余、1公社当り戸数5,000余と報
告されている。その機構は社員代表大会—公
社管理委員会—大隊（文化福祉、防衛、畜牧
肥育、農業、工業各般）—小隊（工場、牧畜
場、堆股小隊、野菜小隊、油脂作物小隊、糧
食小隊）となる。ソ連のコルフォーズ（組合
農場）、ソフォーズ（国営農場）とその軋を—
にしている。組織機構が異なるものの、その
理念の相通するものがある。

この機会にソ連の桎梏のもとにあるとも考
えられるハンガリーの農村の実態を紹介して
みよう。数年前ハンガリーのペーチ大学での
国際学会の余暇を利用して、このバラニヤ県
の農村を視察した。この県では組合農場25万ヘ
クタール、国営農場6,000ヘクタールで大部
分は組合農場である。農産物の収量ではヘク
タール当り、組合農場では小麦5トン、ト
ーモロコシ7.5トン、国営では小麦4.5トン、
トーモロコシ5.5トンで組合農場の方が収
量が多い。協同組合は組合員の利益を守るた
めの共同作業で、出資金を出し、その利益が還

元されるから増産にはげみ、かつ労働に対する報酬も収益によって附加される。完全な私的企業ではないが、企業の自由化の傾向がうかがえる。また特徴的なことは私有地がもてる。1戸1人当り0.6ヘクタール、家族4名とすれば2.4ヘクタール、これが垣根で区切られ、そこには果樹、野菜、花卉などが生き生きと栽培されている。自分の畑にできたものは自由に販売できるからであろう。家庭農園で最も力を入れているものは畜産で、この私有地だけで、国内消費の豚では50%、牛では30%の生産といわれ、私有地の意義は極めて大きい。この地はユーゴスラビヤに境を接し、チトー政権の非同盟化の流れが身近かに感じとられた。(豊田文一：東欧点描 富山県農村医学研究会誌12巻 昭和56年)

さて私は、錦州での農村視察に先立って人民公社について質してみた。ところが意外な答がかえってきた。それは江青ら4人組の追放後政府は人民公社の解体の方向をとり、農村では郷という単位を作り、数戸の農家が協同作業を行ない、その収益を分配する仕組みだという。案内されたのは錦西地区の農村で、道路も整備され、数十戸の集落であった。



第14図 錦西地区農村住宅の門

各家屋はレンガ塀で区画され、カラフルな色どりがほどこされた門を有する。^(第14図)私どもの訪れた農家は、やはり平家建で3部屋、遼寧や錦州市でみたトタン屋根に石をのせた家屋と全く雲泥の差である。1部屋はオンドルの床づきで10坪位あったろう。他の2部屋は台



第15図 錦西地区の農村の居室

所とやはりオンドルづきの約6坪位、部屋にはテレビこそないが、ラジオを有し、棚には装飾品や調度品が並べてある。^(第15図)この主人は大工、農業は妻君と母親、それに妻君の父親、こどもは2人、農業収入を聞くと年間2,000元(約16万円)、その他大工としての収入もあるからかなり生活の余裕があるように見受けられた。ちなみにここは人民公社はかつて組織されていたが、郷として数戸ずつの共同の組合農場である。ここで私はよく耳にする万元戸があるかとささやいてみた。年収1万元(約80万円)以上のものである。ところがこの附近では1戸もないという。万元戸は中国農業の成功例として喧伝されているものである。このことについて共産党機関紙「人民日報」の論説として某紙が報じていた。すなわちその論評は、東北黒龍江省での農村調査によると同省の万元戸は0.18%、しかも、県によっては0.06%と万元戸は極めて特殊な農家である。それに衣食住がやっと足りるものを含めると80%は豊かになったとはいえない。“ニセ万元戸”がなぜ中国農村のシンボルのように喧伝され、数も少くないという印象を与えたか。その最大の原因は上部機関の“おぼえ”を意識した農業政策担当の幹部が農民収入を水まじしたり、実質収入といえないものまで所得に入れたりしたためで、つまり中国流官僚主義が元凶であると筆誅を加えている。しかし私の訪ねたこの地区は土壌も肥沃に思え、トモロコシ、落花生、高粱、

大豆、麦、その他の野菜も青々と実り、村人の衣食住も十分足りるように感ぜられ、過ぎし日に眼にした封建的地主制度の様相を顧りみ隔世の感を覚えた。

しかし黒龍江省の農民の不平の声として以下のような詩が、人民日報（1983）に紹介されている。

大包幹是好（農業の戸別請負はいい）

攤派太多受不了（不合理な負担が多すぎてたまらない）

不包没活幹（請け負わないと生きるすべなし）

包子油水小（請け負ってももうけが少い）

攤派（タンパイ）と呼ばれるものは中国の古来から行われていた地方的、地域的な悪税、農民搾取の方法で今も盛んといわれている。論説者の評論によると生産責任制の実施により農民の収入は増加した。このときとばかり、正当な負担の他に、さまざまな名目をつけて不合理な負担をおっかぶせ、農民の負担能力をこえて割り当てている。1984年農民の1人当たりの年収は370元、それにいろいろの名目をつけて1人当たり70-100元、すなわち税金のほかに年収の25-30%が不正で不合理な負担が徴収される。これではいくらお金をもうけてもどうにもならない。上述した農民不平の詩もこれを物語っている（知識：9月号より）。

以上、錦西地区の農村を瞥見し、私の感慨を述べてみた。

中国、今は

中国の一つの国としての発祥は1500年前らしい。歴史に残されたのは殷からで、これは1100年前にさかのぼる。以来歴代王朝は興亡のあとを繰り返えし、1949年現在の中華人民共和国に至る。

今短期間であったが中国を訪ね、私の見聞をもとに国際的資料、またこれに関連する種々の情報をひもとき述べてみたい。

国土は95,974平方キロ、世界陸地の3を占め、ソ連、カナダに次ぐ大国で、ヨーロッパのソ連を除く全域に匹敵する。人口10億2百万(1982)、全世界人口45億8千万の22.2%、アジア人口27億5千万の38%をようしている。その人口の増加率（1975-1982）年平均1.4%（日本：0.9%）である。ちなみに世界における人口増加率の最高はアラブ首長国連邦6.6%で、クエート6.5%、カタール6.0%これに次ぎ、アラブ産油国の高率が特徴的である。将来人口について2000年で中国は12億5千万（日本：1億3千万）、それで人口増加を防止するため1夫婦出生児1児の奨励が行われている。私のかつて訪れたシンガポールは淡路島位で人口250万、耕地はほとんどなく食糧は輸入にあおいでいる。そのためか人口抑制の一つの方法として、3児以上の子をもつものは税金が累加されている。また人口増加に悩むインドでは保健婦の仕事は産児制限の指導が主な任務であった。インドネシヤでも街に可愛い男女のこどもの顔を画いたポスターを見た。字が読めないので聞いてみると1夫婦は子供は2人にしておけというらしい。

中国の平均寿命は男は62.10才、女は65.90才（日本：男74.20才、女79.78才、1983）、しかし広汎な国で国勢調査の報告もみられないこの国の資料は都会地あたりのものでなからうかと疑問をもつ。ちなみに世界で最低はエチオピアで男37.5才、女40.6才である。

農用地面積の中国と日本との比較

（1981年現在）

| 種別 | 耕地 | 樹園地 | 牧草地 | 森林 | その他 | 総面積 1,000 ヘクタール |
|----|-------|------|-------|-------|-------|-----------------------|
| 中国 | 10.2% | 3.5% | 29.9% | 13.0% | 43.9% | 959,696 |
| 日本 | 11.5% | 1.5% | 1.5% | 67.0% | 27.8% | 37,231 |

「耕地」は一時的作物耕作地（二毛作地は1回だけ計上）休閑地、一時的牧場、菜園地である。樹園地は長期間土地を専有している収穫後植えかえる必要のない耕作地、「牧場、牧草地」は5年以上使用されている栽培又は野生の牧草地である。「森林」は自然林及び栽植林地である。「その他」は建築物敷地、道路、荒地その他である。

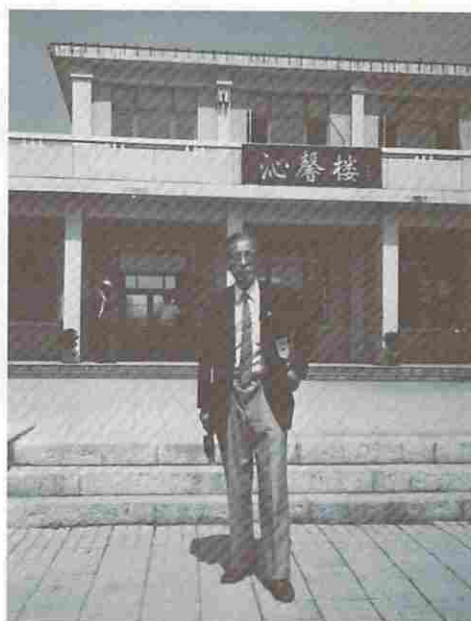
次に食糧基地たる農用面積を中国と日本と比較すると約26倍である。また両国の国土の面積よりみても約25倍であり、農用地の比率はほとんどどちらがわかない。農家人口は中国で5億9千2百万、日本は1千百万、総人口に対する農家人口の割合は、中国57.4%、日本は9.7%でその隔差極めて著しく、さらに農業従事者も、中国では農家人口の58.0%、日本は9.7%で農家人口比率と略同率を示している。この事実は現在の中国の産業の主体は農業であることは否定できず、国際的にみて開発途上国のパターンである。

生活の状況はどうか、労働者の月平均賃金は60元(5,100円)、物価が安いとはいえ、これでは生活が苦しい。夫婦共稼ぎ以外ないだろう。私どもは錦州市で石油工場をみたが、従業員5,000人のうち女性は40%、そのため完備した保育所(幼稚園)^(第16図)があり、0~6才まで720名収容している。この保育所を見学したが、これだけの設備の整った所は、日本でも私は見た経験がない。ここで幼児達が、鮮やかな衣装でソーラン節、四季の歌、タンゴなどを踊り、私どもの旅情を慰めてくれたことは印象に残っている。



第16図 石油工場保育所(幼稚園)の窓から園児の歓迎

また、退職者のための厚生施設として老人ホーム(沁馨楼)^(第17図)があり、近代的の建築がなされ、娯楽施設も完備し、ことに新中国で禁止されたと聞いていた麻雀を楽しんでいたのに驚かされた。



第17図 石油工場老人ホーム沁馨楼

この錦州は、東北地区の一つの点に過ぎないが、重要な工業地帯で、数千人の労働者をもつ企業では、このような福祉厚生に力を注いでいるのではなかろうかと思われる。

さて、住居であるが、個人の所有も認められている。ただし、土地はすべて国有で私有地はなく、それに対し税を払っている。遼寧、錦州でホテルの附近を歩いてみたが、個人住宅は数十年も前に建てられたようなもので、レンガを積み上げた平家建て、屋根は赤錆びたトタンぶき、それも屋根の上には石ころがのせてある。ちょっとのぞいてみると大抵は一間、そこに何人住んでいるか知れないが、小さな台所に僅かばかりの鍋釜がおかれ、その片側にオンドルつきの床がしつらえてある。この一間は4~5坪位のものである。しかしそれに近接した所に近代的アパートが所々になっている。^(第18図)また、この古い住宅もこわされておる所も少なく住宅の近代化が着々進捗しているのがみられ、都会地では十数階のものもあり、建築中のクレーンの林立も望まれた。これも規模がきまっているらしく、アパートは14平方メートル、つまり4坪余で、

家賃は4元(32円)、その内部をみる機会がなかったのが残念であった。



第18図 古い庶民住宅（錦州市）



第19図 近代的アパートと古い住宅が混在する（錦州市）

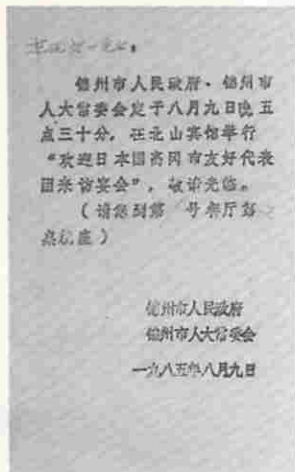
中国の現状を顧みるならば1949年、中華人民共和国が成立し、ソビエート方式によるマルクス・レーニン主義そのままの労働者農民を主軸とした毛沢東の独裁ともいえる国であった。「毛沢東は世界人民の心の太陽、毛思想は世界人民の革命の灯台、現代マルクス・レーニン主義の最高峰」と讃えられる程で、それが自信過剰となり、その革命理論やその路線が中国社会の実体、能力、人民意識を無視したプロレタリアート独裁の革命に対し1968年、国の実情に即した革命理論をとなえる鄧小平派から挑戦、これは1966年中学生、高校生、大学生らが腕に「紅衛兵」の腕章をまいて、造反革命の嵐をひき起した。しかし、その主謀者らは追放の憂目にあっている。1976年1月周恩来、9月毛沢東が死去し、建国以来最大の危機をむかえた。このとき毛沢東未

亡人江青を中心とした文章派の4人組が党・軍・政の大権を一挙に手中に収めようとしたが、葉剣英、華国鋒派により逮捕され、10年動乱といえる文革が終焉し、華国鋒時代となった。政治体制の転換のために四つの近代化を打ち出した。すなわち農業、工業、科学技術、国防の近代化政策である。しかしこの政策のうち重工業はとくに冶金工業に片より、農・軽工業はそれぞれ10%、5%と極めて低く、交通、文教、科学技術、衛生、住宅などの分野での立ち遅れ、さらに工業生産能力は政策に反して低い水準に止まっているといわれる。これらの原因のうち特に注目すべきは人材の不足、経済政策策定の専門家の不足、経済政策財務諸表の未整備、策定に必要な人口統計、物資の需給統計、さらに人民大衆の生活への関心動向に対する認識の不備などプロレタリアート独裁のひずみは、中国の将来発展の途は容易ではないだろうと察せられる。私は中国の現状を把握するためその指数を総務庁統計局の国際統計要覧はじめ色々の資料を繙いたが、中国に関する項で不詳、不明と記されてある所が少なかった。しかし私どもは数日間の滞在であったが、同行の人々と語り合ったことは、人民公社の解体が進みつつあり、工場見学でみた福祉厚生施設整備など自由経済諸国に近づきつつあるように見え、近い将来には日本の現状に到達するのではなかろうかと。ただし、それには20年ないし30年の歳月をみなくてはならないだろうとの意見が多かった。

以上断片的ではあるが、中国の現状をみて感じとったものを述べてみた。

簡化漢字（簡体字）

錦州市長から私どもにレセプションの招待状が渡された。それには丰田文一先生と宛名書きされていた。私は丰の字を見たことがない。トヨは豊または豊であれば読める。それで好奇心からこの略字について色々の記録を



1932年「教育部国語統一〇備委員会」
1955年の「全国文字改革会議」で515
(のち517)審定「簡体字」あらゆる
漢字を10画以内にちぢめよう……

など敦煌での出土文書には、すでに粗雑な筆使いがみえている。宋以後に発見された活字以前の木版本には、現代の略字より進んだものが見えているといわれる。これは木版下を書く技術上の理由もあったらしいが、当時の人々にはこれを常用字体としたい意向もあったろうとも考えられる。その後の歴史は長く、文字に関する変遷もあったといわれるが、最近の略字は第2次大戦後の中華人民共和国成立後のことである。最初は政府の正式文書には略字を用いなかったが、1952年常用字2,000を政府が発表し、学習の基準を規定し、正式には1955年政府直属の中国文字改革委員会より簡化表が発表された。その後も検討を重ね1964年簡化字2,252字が決定され、併せて使用範囲もきめられて今日に至っている。この示された文字をみると日本の当用漢字と共通のものが少くない。例えば聲→声、與→与、萬→万、區→区、號→号、舊→旧、當→当、師→师、來→来、縣→県、彎→弯、蠶→蚕、觸→触など、その他も数多く見出される。また、略字も字体から想像しうるものもあるが、その反面奇抜なものも多く、私の苗字の丰(トヨ)、発音ではfengの如きものは日本人とし

あさってみた。中国では古い時代から略字はあったらしい。古代の銘辞(金石に刻した文)や経典の類は正しい字体で書かれた筈であるが、唐末五代の僧たちが仏典を筆記したもの

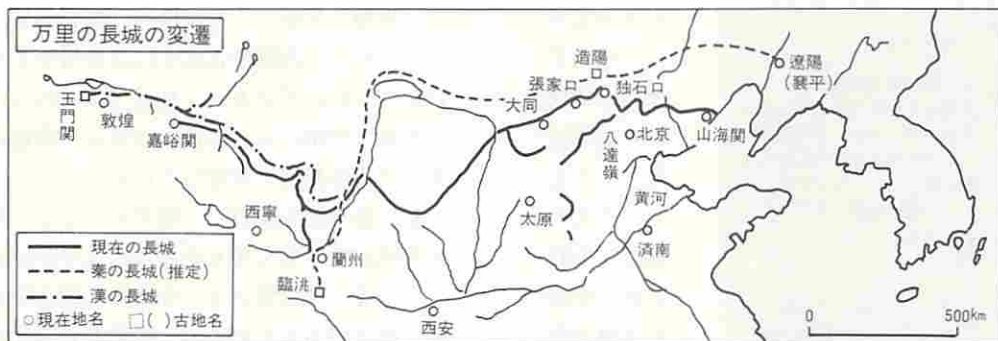
では理解できない。ただ略字(簡化漢字)を公布したとき古典や古文学には応用せずともいいといわれているが、最近ではこれらの場合も略字が用いられることが多く、急速に普及して文字教育に貢献している。

私は諸外国を旅行して感ずることは、たとえ会話ができなくてもその地の文字が読めると心の安らぎを覚える。今度の中国訪問も奇妙な略字があるものの何とか意味を解しえ、同種系民族で顔や体型も似ているし親密感が深い。これに反し5月韓国に旅行したとき、すべてハングル文字、看板も観光客の大半を占める日本人に対し日本語を併記するか、英語でもと思われるもののそれは皆無に等しく、ものを買うにも店のなかに入らなければ品物が判らない。不自由な思をするものは私のみではなかつたろう。日本人の訪れることの多いヨーロッパの観光地、ことにスイスのジュネーブでは街の通り名まで日本語が併記して「レマン湖岸通」、「モンブラン街」とか、また店先には「日本人のお客さんどうぞ、20%値引いたします」とか書いてある。アルプスの登山電車のアナウンスも英仏独伊語に日本語も用いており驚かされた思い出がある。

今度中国旅行では、錦州駅頭はもちろん訪問した官公衙、工場、医学院、中学校など赤地に白を浮き出し、「熱烈歓迎日本国高岡市貴賓來我市訪問」の大きな横断幕がかかげられている。ただし歓、迎、岡、賓は簡化漢字が使っている。錦州市において友好の絆を固く結び、心暖まる歓待を受け、感謝の念を禁じえない。

不到長城 非好漢

表題の言葉は、長城を見ないものは好漢に非らずというものである。「日光を見ずして……」云々のようなものである。私はかつて山西省北部の山岳地帯に駐留したものの中国の観光の眼玉で、人々の群らがる八達嶺の長城ははじめてである。今までその長さは2,400



キロといわれたが、調査が進むにつれ5,000キロと伝えられる。そのうちここは長城のうちでも北京の守りとして最も強固な防塞であり、中国北辺蒙古地域よりの匈奴（きょうど：前3世紀末より5世紀にわたって蒙古に繁栄した騎馬民族）の進攻に対する防禦線をかたちづけていた。前3世紀秦の始皇帝が天下を統一すると、それまであった防禦線を変更したといわれ、遼寧省の遼陽より嘉峪関（甘肅省）まで連らなっていた。しかし漢代になると更に延長し、国土の西端敦煌の西、王門関まで達した。また長城の位置が今日の如く南下したのは6世紀のことで、北齊や隋が契丹（きつたん）の進攻を防ぐため築いたものである。遼陽から甘肅省の岷県に至るまで延長万里余といわれていた。

私は長城の姿を写真などを通じてみていたが、古代中国の興亡のなかに秘められた歴史、また新しい中国の誕生、幾多の変遷をファンタジーと詩情のなかに蘇がえるだろうとの期待を抱いて訪れた。しかし約2時間というバスの行程、車の列、ことに他の自動車の事故での渋滞、さらに八達嶺の尾根を蛇行する長城には砂糖に群がる蟻の如き人波があふれるように望見される。古い時代の人達の権威の具象化の歴史を静かに瞑想のうちに感じとろうとした私の思いはふっとんでしまった。全くの観光地、かつて中国に旅したある人がいった言葉、「煙突のない工場」これが今中国の財源の重要なものの一つである。すなわち観



第20図 山海関の天下第一関の扁額



第21図 長城より狼煙があがる



第22図 長城の最上部附近。ここまで来ると人が少い。

光資源が一つの生産であるという意味が肯づける。

私は1937年9月、釜山—瀋陽(奉天)—山海関—天津と軍用列車による行程の途中、山海関でみた“天下第一関”，これは渤海海岸を起点とする最初の楼門でこれを見あげた雄大さが今でも記憶の片隅に残る。ここで眺めた八達嶺の長城は天下第一関の雄大さにもまさる威容を示し、高さ9m、巾上部4.5m、底部9m、標高800mの荒々しい岩山の分水嶺にそそり立つ。その頂上をうねうねと連らな^(第20図)って、8頭立の馬車が走れたとも伝えられる^(第21図)。その構築は長城のうちでも最も壮大堅固な場所の一つで、上には凸字形の女牆(じょしょう：城の上のたけの低いかき、ひめがきの意)を築き銃眼を開き、約100m間隔に墩台(とんだい：こしかけ)が作ってあり、恐らく警備兵がたむろしていたのであろう。この墩台は視野の広がる所に位置し、外敵の侵入を監視し、異変があれば狼煙をあげる。この狼煙は当時の通信網で、次々の墩台へ引き継がれ、附近の城市の軍勢がかけつけたといわれる。長城は石積み、地形によっては断崖を利用し、重要な部分は埽(ちゅあん)で被覆されてあるという。版築を作る工程は、その材料は黄土を用い、両側に板をたて、この間に黄土を入れ、少し水を加えて粘土状とし、杵で粘土を搗きかため、板をはずして乾燥させると堅牢な埽(ちゅあん)ができる。

しかし5,000kmにわたる長城の大部分は土壘に近いものでなかろうか。私の入手した敦煌附近の長城の姿は、全くの土壘で、すでに潰れおち、考古学的発掘により、かつての様相が想像されるのみ。^(第23図)

私は先に述べた如く、1937年、河北省の平原を西南に進み、臨城附近より省境に連らなる太行山脈の峻峻を越え山西省に入った。そこには長城の支脈ともいえる九龍関があり、楼門そのものは姿を止めていたが、防壁は陽焼レンガ積み重ねであったろう、崩れおち



第23図 敦煌附近の長城

ている場所も多く、こぼれ落ちているものを靴で踏みつけると脆くもつぶれたのを憶えている。漢代に作られたという敦煌附近では、その廃墟からでたものは、楊柳の枝、葦、藁、乾燥した草などを束ねて強靱さを強めてあるという。しかしこの八達嶺で私の眼に映じた堅固な防衛線は始皇帝の偉大な権力の象徴として懐古の念を禁じえなかった。

さて、先に図示した長城の変遷をみると、匈奴の進攻に備えたことは明かであり、かつそれぞれの時代の勢力情勢もうかがえる。しかし前3世紀からの中国本土と蒙古地域との境界をなしていたことは注目すべきことで、南北両民族の交錯点として、政治経済文化の上で演じた役割は極めて大きい。長城は北方民族進攻に対する防禦の目的を果たし終り、今は行政区画の境界線に過ぎない。なお一つ付け加えるならばオウエン・ラティモアの説によると遊牧地を保護するのも、長城を築いた目的であったともいう。

私は人の波にもまれながらも甬道(通路)の急坂を喘ぎながら最高峰近くまで登ったが、ここは流石人かげはまばらであった。時間的制約もあり2000年の歴史の流れを心めうちに蘇えらせる余裕はなかった。ただ心なしか下の溪谷に眼をうつすと、この間を縫って列車がはい上ってくる。幾度かスイッチ・バックを繰り返しながら視界から消える。この鉄路は、北に進めばモンゴル人民共和国ウランバートルを経て4,000kmでソ連領へ、西すれば

5,000kmで新疆自治区のウルムチへ通ずる。

さて、先に知人に教えられた“煙突のない工場”という言葉を想起する。長城は観光資源として最たるものであろう。その周辺には、ホテル、レストランなど近代設備をほこって林立し、長城下の広場には、露天での土産物屋で埋められ観光客を呼びこんでいる。古物を並べた骨董品らしきものもある。どこで掘りおこしてきたか知れないが、石造りの仏像の頭に興味を覚え、値切りながらも財布のひもをゆるめざるをえなかった。

衛生間

往路北京空港に正午前に到着し、午後6時瀋陽（旧奉天）行きの航空便によることになっている。それで昼食は、市内のあるレストランでしたためることとなる。食後、生理的要求もあり、ボーイにトイレの場所を尋ねると案内してくれる。そこでふとみると上の掲示板に「衛生間」とある。その下にW.C.と



第24図 衛生間（北京・レストランのトイレ）



第25図 廁所（北京空港のトイレ）

添書がみられた。この添書がなければ、私どもの感覚では恐らく休養室位に考えただろう。なかは洋式である。^(第24図)

中国ではトイレは、一般に厠という言葉を用い、厠はシと発音し、また厠（セイ）という字もつかう。^(第25図)「營壘井窳厠」といって建物、土台、井戸、かまど、便所は生活に欠かせない必須条件である。日本でも40～50年前まで厠という字が使われ、川屋すなわち川の上に作った小屋で、用をなすと上から下に落下し、瞬時に流れ去る。これは山小屋の便所でよくみられた風景である。ただ、この厠は金沢あたりの古い料亭では今なおこの文字を用いる所を時々みかける。私は40数年前、中国で経験したものは、便池の上へ板をわたし、真中に隙間を作る。その上に4本の棒を組んで支柱とし、円座がのせてある。腰をかけて用をたす仕組である。その頃、私どもは洋式のように腰をかけて用をすます習慣はなく、この仕組を外して、直接便池に投下した。その頃、中国の永い風習で女性にはまだ纏足（テンソク）が残っており、ヨチヨチ歩きで、かがむことは至難のわざであった。そのためこのような工夫がこらされたと思えた。しかし纏足も清朝末期に禁止令が出されたものの、その頃は、高齢者に時々みられ、農山村に多かった。

かつて、私は外国を訪ねたとき庶民の家のトイレに、それぞれ特色があり「トイレ談義」（金大耳鼻科同門会誌）として一文を草した。しかし“衛生間”というのははじめてみた。わが国では、ほとんどトイレを日常用語としているが、時には“ご不浄”、“はばかり”、“おちょうず”、“お手洗い”、“便所”などで、昔は“雪隠”（セツイン）で、この語は連声となり“セツチン”と発音される。この雪隠も、中国に起原を發し、字源によれば烏瑟摩經註「福州雪峰義存禪師、常住掃除、於是大悟、故名矣」、また一説には雪峰禪師が、靈隱寺の浄頭、すなわち便所の掃除を掌る役目な

りし故にいうとある。またこの雪隠にまつわる色々の比喩が人口に膾炙されている。2, 3を拾ってみると“雪隠詰”将棋で王将を盤の隅に追いこんで詰める。“雪隠大工”雪隠の工事などの他、使い道のない下手な大工, “雪隠で饅頭”自分一人で利益をえようとする意, “雪隠火事”(ヤケクソ)などがあげられる。この雪隠も中国渡りの言葉であるが、中国では見たこともなかったし、日本では比喩として残っているのみ。

また北京でのホテルで、これもはじめてみた掲示板「盥洗室」(クワンセンシツ)と書かれ“GENTL MEM”“LAVATRY”と附記してある。(第26図)



第26室 盥洗室 (北京ホテルのトイレ)

盥はトライ、手を洗う盤、そそぐであり、添書ではじめてトイレと判る。

また、錦西附近の農村を視察したとき、ある家のトイレをみた。住宅から15m位離れた露天である。三方塀で囲ってあるが一方は開放、これは地上のコンクリート床に巾10cm、長さ30cm位の長方形の隙間が作られ、この穴の上をおおう板に1m位の棒がついており、用を足すときは、これを外して流しこむ。流れこむ所は便池で塀外にある。ここで農業について聞いたが、肥料には化学肥料を用いない。すべて人や家畜の排泄物で堆肥を作り、耕地に用いるという。わが国も30~40年前まで同様であった。このようなことから農村では高率の寄生虫保有者がいるのではなかろうかと想像される。(第27図)



第27図 錦西地区農村の便所

このトイレは、かつてみたインドの農村のトイレと全く似ていたが、ここは屋内に設けであった。どちらが、源であるか知れないがアジアの農村には、このような処が多いのでなかろうか。(第28図)



第28図 インド農村の便所

さて、トイレにまつわってのついでだが、英語では Lavatory, Toilettroom, アメリカでは Washroom, Toilet Restroom, 屋外では Prisy, 公共の建物では Mens Room, Ladies Room が用いられているようである。ただ帰国してから女子団員から聞いたが、ある所でトイレへ入ったが、内部は開放的で、それも、10cm位高くなった所に、10個程の穴があり、隣との壁もなく、並列して用をたすという仕掛、それも汚れており、不潔で、目的を果せず止めにしたとのことである。(第29図)

以上あまり上品でもないことを書き綴ったが、中国は漢字の源の国であり、その文字の使いようが珍しかったので、敢て紹介したわけである。



第29図 ある所の女子便所

追記

帰国のとき、北京のホテルより空港まで、市長ご夫妻と同乗した乗用車は“紅旗”といひ上海製である。この車は江青の公用車であったと知らされた。後部座席は3名、その前に2名の座席が向いあっている。運転席は3名ゆうゆうと坐れる。後部もゆったりしている。2名の座席は恐らく警護のものが乗っていたのだろう。1976年、毛沢東、周恩来が相次いで死去、中華人民共和国と中国共産党の未曾有の危機が到来したとき、党・政・軍の大権を一挙に収めようとした文革派4人組が、



第30図 江青の公用車であった“紅旗”

葉劍英、華国鋒らにより逮捕され、拘禁されたまま今日に至っている。かつて中国の独裁者の一人として君臨した江青が、このシートに席を暖めていたことを思い、感無量であった。(第30図)

むすび

今回、高岡市青年の翼に同行したが、私にとって今日の中国を見聞し、断片ながら新しい認識をうることができた。また、重要な目的であった錦州市との友好都市締結も、今後の両市の経済、文化、科学など広範囲の交流のいとぐちとなり、意義深いものがあつたと思ふ。また、青年の団員諸君も、なかにははじめての海外渡航の人もあつたろう。しかも、短時日であつたものの、わが国と中国を対比して、きびしい国際情勢の現実を旅行のうちに感じとられたことと思われる。この経験を日常生活の糧とされ、それぞれの職場において生かされるよう希望して止まない。

私は一行のうちただ一人の医師として団員各位の健康管理に十分意を用いたが、それぞれ統制と秩序を守られ、かつ健康に留意され帰国されたことは喜びにたえない。

なお、擱筆するに当り、格別のご配慮をいただいた堀健治市長に深甚なる謝意を表する。

附図 私は日中事変勃発とともに召集され、約2年有る山西省に駐留した。その頃を想起し、ここに、当時のかの地の様相を呈示して参考に供したい。(撮影は昭和13、14年のものである)

(A) 農村のこどもの風俗



(B) 物資を運搬するラクダ群(太原)



(C) 若い女性の服装



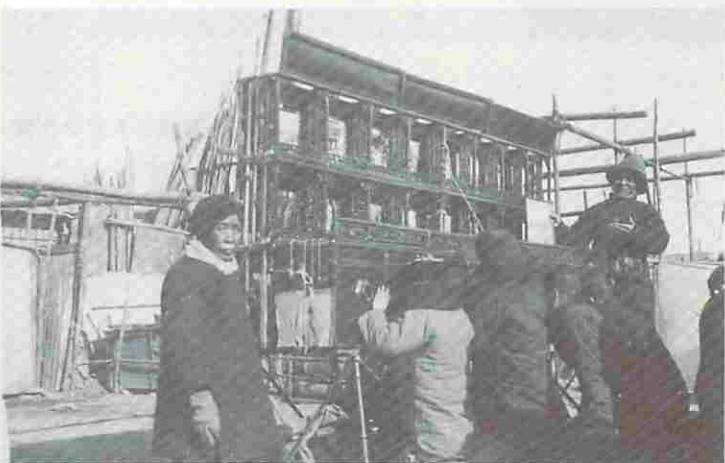
(D) 葬式風景



(E) 落穂拾い
山西省忻県



(F) のぞき
眼鏡、盛り
場などで銭を
とってのぞか
せる(忻県)



(G) 一輪運搬車
(忻県)

